



[書評] 鄭黄燕著『都市化の中国政治―土地取引の展開と多元化する社会』

梶谷, 懐

(Citation)

中国研究月報, 78(8):31-32

(Issue Date)

2024-08-25

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491551>



—【書 評】—

鄭黄燕著 名古屋大学出版会

『都市化の中国政治
——土地取引の展開と多元化する社会』

(神戸大学) 梶谷 懐

本書は、中国農村の都市化の過程を、農村の土地取引をめぐる地方政府（市・区政府）と、農村の自治組織である村民委員会、そして村民との力関係に注目することで明らかにしようとした力作である。現代における農村の都市化について論じた先行研究は数多いが、本書の特徴は、E. パーゼスの同心円地帯モデルなどに影響を受けた「三元構造」として中国社会をみる議論の流れを受け継ぎ、都市化によって生じた農村と都市の中間的な空間に着目することで、従来の二元構造的な枠組みを改めて問い直そうとするところにある。都市化が地域的な差異を生みつつ、都市－農村の二元構造を変容させるプロセスを、膨大な政策文書の整理とフィールドワークにより丹念に整理した点は特筆に値する。

ただし、本書の中で、都市化によって生じた「中間領域」が必ずしも明確に定義され、空間的・制度的な実体を持った存在として提示されるわけではない。むしろ本書の関心は、村民委員会や村民小組など農村自治に関わるアクターが、農村の都市開発によって生じた「(伝統的) 農村でもなく、都市でもない領域」において、いかに自主性をもって、村民たちの利益を実現するため活動してきたのかに焦点が当てられていると言ってよい。その意味で、本書は中国社会における中間団体の役割に注目することで、農村政治のダイナミズムを解明しようとした研究だと言ってもよいだろう。

そして本書の最大の貢献は、こうした都市化のプロセスに関する解像度の高い分析を通じて、そこで村民委員会などの「中間的な存在」の役割が果たした役割が、地域ごとに大きく異なっていることを明らかにした点にある。

たとえば、広東省や中国南部の農村は、政府主導による都市化プロセスが本格化する1998年以前のかかなり早い段階から、村民委員会が主体となって農地の流動化や事業用地への転用が積極的に行われてきた。このように、むしろ村民委員会が都市化のプロセスを担い、都市化後の住民自治においても大きな役割を果たしたケースを、著者は「都市を作った村」と名付けている。一方、1998年以降に地方政府主導で都市化が進められた吉林省長春市および河南省鄭州市郊外の農村では、その過程で村民委員会が主体的な役割を果たすことはなく、地方政府と利害を共有するディベロッパーとの対立が生じた結果、次第にその機能が弱体化していった。著者はこれらのケースを「都市に飲み込まれる村」と呼んでいる。一方、同じく1998年以降に都市化された福建省福州市近郊の農村では、村民委員会が集団所有資産を株式化した不動産管理会社を設立することにより村民が自らの利益を守ることに成功した。著者はこの福州市のケースを「都市と協調する農村」と位置づけている。

これらのファクトファインディングはいずれも貴重なものであり、特に外部の研究者が農村でのフィールドワークを行うことが著しく困難になっている現在、私たち研究者が農村の変化の現状を理解するうえで貴重な材料を提供してくれている。この点を評者は積極的に評価したい。

そのうえで、本書の議論の枠組みに関して、評者が気になった点をいくつか指摘したい。

その一点目は、すでに述べたとおり、本書が主な分析対象としているのはあくまでも村民委員会や村民小組といった「中間団体」が農村都市化のプロセスにおいて果たした役割であり、必ずしも農村・都市という地理的・行政的な区分の「中間地帯」の存在意義を積極的に明らかにしたわけではない、という点だ。もちろん、農村政治のダイナミズムを理解する上で、中間団体の役割に焦点

を当てることには大きな意義がある。しかし、中国社会において「中間団体」をどのように位置づけるか、という問題についてはすでに膨大な研究蓄積があるにもかかわらず、残念なことに本書ではそれらはほとんど参照されていない。そもそも、村民委員会のような自治組織は、都市と農村の中間にあるというよりも、「政府と民間」の中間にあるものとして位置付けるべきものと思われる。このような視点から村民委員会を位置づけようとするなら、著者の研究は都市および農村におけるNGOの活動をあつかった李妍焱などによる一連の研究（李（2012））ともかかわりを持つはずだし、さらには戦前の日本における中国社会の「中間団体」のとらえ方に焦点を当てた岸本美緒の研究（岸本（2006））などとも問題意識を共有できるのではないだろうか。

二点目は、本書が論じていない視点として、中国農村が歴史的に受け継いできた「慣習」が、村民委員会のような中間団体の「強さ」をある程度規定している可能性がある、ということである。本書が、村民委員会が主体的な役割を果たしたとして評価する広東省や福建省などの華南地方は、一般的に宗族、すなわち父系の親族間のネットワークが強固な地域として知られている。このような宗族を介した村民の「まとまり」が、中間団体としての村民委員会を支えた可能性に注目する必要はないだろうか。逆に、長春市が位置する吉林省を含む東北地方は、伝統的に村落の自立性が乏しく、それが日本軍による満洲支配を容易にした、という指摘もある（安富・深尾編（2009））。このような地域固有の歴史的背景への配慮は、本書のような農村政治のダイナミクスにおける地域間の多様性を明らかにしようとする研究にも大きな示唆を与えてくれるだろう。

中国農村政治研究をリードしてきた研究者の一人である田原史起はその近著の中で、都市化の進展によって農村人口が旧県城を中心に開発された

「県域」に吸収されることで、「都市 vs. 農村」という従来の二元構造が、「中・大都市 vs. 県域」という構図に変わってきているのではないか、という興味深い指摘を行っている（田原（2024））。その上で政府は、激しい競争社会である中・大都市に住む人々と、「大きな田舎」である県域に住んで「まったりと人生を送る」人びととを区別し、ダブル・スタンダードで統治しようとしているのではないかと述べている。

田原のいう「大きな田舎」としての県域こそ、本書の本来のテーマである、都市化により出現した都市でも農村でもない、中間的な領域の特徴をよく表しているように思われる。たとえば、本書がいう「都市を作った農村」「都市と協調する農村」だけでなく、「都市に飲み込まれる農村」に住む人びとも、「大きな田舎」＝県域で生存の危機に脅かされずまったりと人生を送ることが可能なのか。この点にこそ、本書が関心を寄せるポスト都市化の中国社会がより多元的で、安定したものになるかどうかのカギがあるように思える。著者がこれらの点を踏まえて、「草の根の中国社会」に対する理解をより深めていかれることを期待したい。

（2023年9月、268ページ、5,400円＋税）

【参考文献】

- 岸本美緒（2006）「中国中間団体論の系譜」（岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知 第3巻 東洋学の磁場』岩波書店）
- 田原史起（2024）『中国農村の現在——「14億分の10億」のリアル』（中公新書）、中央公論新社
- 安富歩・深尾葉子編（2009）『「満洲」の成立——森林の消尽と近代空間の形成』名古屋大学出版会
- 李妍焱（2012）『中国の市民社会——動き出す草の根NGO』（岩波新書）、岩波書店